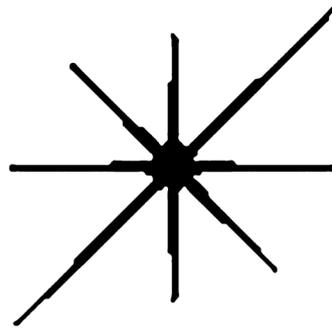


コメット通信 4



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

目次

【特集 新型コロナウイルス・パンデミック下の文学——海外から】

清浄と不浄

ジェラルド・マセ——03

禁じられたアジア

エリック・ファーフ——05

パリの空気

イト・ナガ——07

病という試練

アナイト・グリゴリヤン——10

舞い飛ぶウイルスへの覚書

オラシオ・カステジャーノス・モヤ——13

シリーズ「エコクリティシズム・コレクション」の想像力

野田研——16

ARAKAWA から ISOZAKI へ

——荒川徹さんの吉田秀和賞受賞に寄せて

沢山遼——18

夢のような物語

高山花子——20

Quarantine

高須次郎——22

【連載】

失われた旅を求めて

——Books in Progress 4

廣瀬覚——23

原田マハからバルザックへ

——裸足で散歩 4

西澤栄美子——25

清浄と不浄

ジェラルド・マセ

善／悪という言葉はもはや口にするのもためられる。概念としてあまりにも浅薄だし、いささか愚かしくすらあるからだ。では異なる語を用いて、ひとつ問題をずらしてみようということになる。その役割を担ってきたのが、きれい／きたない、清浄／不浄といった言葉である。これらの言葉については、隙あらば自然法を持ち出す用意のある筋金入りの狂信者たちがいるが、彼らは必ずしもそのことを知らない。

清浄／不浄は世の宗教の根本を支えてきたし、より近世ではつねに排除を是とする社会、つまり、同じひとつの共同体の中に排他的集団を形成する忌まわしき社会理論の礎となってきた。清浄／不浄の線引きなど所詮想像上のものにすぎないが、この線はあらゆる社会を縦断し、人みな肉体を通り抜けてゆく。右手で食べること、乳と血を混ぜないこと、豚を忌避すること、女性を邪な目で見ないこと、神の名を口にしないこと、用を足すときは履物を変えること。列挙してみればきりがないが、こうした禁忌や制約はわれわれの理解を超えるものでもないだろう。それが排斥や虐殺の根拠とならないかぎりには。

害悪との戦いは、都市を組織するうえでもひとつの課題である。ゴミや死体をどのように処理すべきか、腐敗から身を守るにはどうすればよいか。人類は、病原菌を発見し、病気の伝播を理解して以来、経験ではなく知識によってこれに対処する術を手にしたが、古来の恐怖を克服できたかといえどそんなことはまるでなく、依然として大量殺戮は行なわれてきた。

なぜなら、理性による歯止めがひとたび利かなくなれば、衛生思想は優生思想に、清潔さは根拠なき純粋さに転じうるからである。三名の公衆衛生医師の物語が投げかけるのはこうした問題である。私は paran = デュシャトレを追ってアルチュール号ではるばるアンティル諸島まで向かい、ペストとコレラと戦うアドリアン・プルースト博士（そう、マルセルの父の）の軌跡を辿り、デトゥーシュ博士 [ルイ = フェルディナン・セリーヌ] の欺瞞に憤慨したのである。

だが腐敗は希望の息の根を止めはしない。エコロジーをめぐる言説が幾多の危機を指摘する一方で、それなくしては生命の勝利もないであろう様々な変貌もまた存在するのだ。私にそんな確信を取り戻させてくれたのが、幼年の思い出であり、読書の情熱であり、ワインの風味であった。

*

上の文章は、あるエッセイ集 [*Le navire Arthur*, Arléa, 2020] の序として 2019 年の夏に書いたものである。あの頃はまだ、今日のわれわれを脅かす感染症のことなど話題にも上っていなかった。この本が出版されたのは 2020 年 3 月のことで、程なくして書店は軒並み店を閉じ、外出制限が広まった。

私はなにも予言者や見者を気取りたいわけではない。そうではなく、文学とはなにかということを考えてみたいのだ。文学の仕事はジャーナリストや社会学者のように時事問題にコメントすることではない。それはもっと手探りでもっと直観的な（いわば「詩的な」？）仕事で、時として大きな災害の先をゆくこともある。文学には時代の空気を繊細に感じ取る力があるからだ。

作家とは鋭敏な触覚をもつ大型の昆虫であり、世の出来事を網の目に搦めとる蜘蛛である。

(鈴木和彦訳)

執筆者について――

ジェラルド・マセ (G rard Mac ) 1946年生まれ。アンドル＝エ＝ロワール在住。詩人、批評家、写真家。小社刊行の主な著書には、[『オーダーメイドの幻想』](#)、[『記憶は闇の中での狩りを好む』](#)、[『つれづれ草』](#)、[『帝国の地図 つれづれ草II』](#)などがある。

禁じられたアジア

エリック・ファーク

ときどき、パリの街中を歩き、顔の下半分を隠している通行人に会うと、作家という種族は人間のなかでもこうしたパンデミックに対抗するのに一番よく武装した範疇に以前から属していたのではないかと考えてしまう。比喩的な意味で、作家たちはすでにマスクをつけていたのではないだろうか、そして、彼らはだれよりも、自分自身の何を隠したいと願っていたのかをすでに知っていたのではないだろうか。私が外出自粛期間中に再読した三島の『仮面の告白』は、実際のところ、自伝的な性格をもったほとんどすべての小説の総タイトルにもなりうるように思われる。

地球全体を襲っている長期的な公衆衛生上の危機を素材として、作家たちはいったいどんなテキストを書くだろうか。より一般的に言うと、この危機は作家たちの作品の性質になんらかの影響を与えるだろうか。我が身に起こったことをもとに考えると、影響はあると思う……。パンデミックが2月から3月にかけてフランスを襲ったとき、私は台湾に出発する準備をしていた。2カ月間現地に作家として滞在すべく招聘されていたのだ。準備は万端整っていた。ところが3月になると、この滞在は後日に延期しなければならなくなった。飛行機はもう飛んでいなかったし、国境は閉鎖されたところだった。ところで、私は台湾を舞台にした小説を書こうとしていたのであり、そのための様々な現地調査をしようと計画していた……。フランス政府によるさまざまな外出自粛政策のせいで、2カ月間、パリ近郊の自宅に閉じこめられた私は、小説のテーマを変えざるを得なかった。そしてコロナウィルスは私の創造力にきわめて具体的な影響力を持つことになる、というのも私は別な小説を書き始めたのだから。

そんなことはおそらく陳腐な話だろうとは思ふ。しかし、外出自粛と人との接触の減少とは作家がおおいに必要としていたものを作家にもたらしたということ喚起しておく必要があるだろう。すなわちそれは、瞑想し、正確な考えと言葉を自分のなかに探すための時間である。パンデミックの期間、作家たちの仕事は過去の諸世紀の作家たちのそれとすこしばかり似ていたと私は確信している。なぜなら、2020年、作家たちは、電車にも飛行機にも乗れず、友だちにさえ会えない日々のすべてをまると執筆に捧げることができたからである。そしておそらくまた、家の外では、過去の困難な時期——戦争、政治危機——あるいは、過去の疫病を想起しかねない不安な空気が漂っていたからである。こうして文学は、それを書いている人間にとっても、読んでいる人間にとっても、再び避難所となった。私はかつてこれほど多くの読書時間を持てたことはなかった。そして中断することなく、そしてよくあるように、さまざまな活動のせいで読書時間が細切れにされることなく、連続的に一冊の本を読むという幸せを発見した。

この貴重で豊富な時間を私は日本の映画と小説に関するエッセイを仕上げるのに使った。定期的に滞在したいと願っているアジアが閉じられ、いわば「禁じられて」しまったので、私はアジアの映画と小説のおかげでそこに行ったということになる。文学が飛行機に取って代わったのだ。それでもやはり、私の想像力は国境が閉鎖されていたために、今年のパンデミックの期間中ずっと苦しんだと言わなければならない。私にとって文学的な素材であった旅が禁じられたため、私はもう自分の書くページに旅から得られる栄養を与えることができなくなった。苦痛は二重だった。アジアに行けないこと、

私の旅を書いて報告することができないこと。

パンデミックはまた、苦境に陥った時に文学がどのような位置を占めるのかを観察する機会でもあった。多くの人たちがアルベール・カミュの『ペスト』を発見したり再読したりするのにこの時間を使った。私はジャック・ロンドンのみごとなSF小説『赤死病』を読んだ。幸いなことに、私たちはまた病気とは関係のない本も読んだ！ 5月、外出自粛期間が終了するやいなや、フランスの書店は再開した。そして人々は本に「渴いて」いた。それ以来、書店には前年よりも多くの客が訪れ続けている。コロナウィルスによる幽閉生活は読書の必要性を生み出したのである。おそらく囚人たちのなかにも、本と、同じような繋がりを感じている人もいるのだろう。そうした人たちにとって、本は他者や荒々しく禁じられた世界に向かって突然開かれた天窓になるのだ。

こうした文学作品の読書欲の回復は今後いつまで続くのだろうか。書店主たちは、これまで一度も見なかった客が店に来ていと証言している。それは吉兆だ。おそらく私たちはこの例外的な年に、考察したり、詩や小説といったパラレルワールドのなかに飛びこんだりするのに適した「長い時間」の効用を再発見したのだと思う。多くの人たちが、そうしたパラレルワールドが自分には必要だと理解したのである。なぜなら私たちがこれまでおろそかにしていた自分のなかのある部分の探検を文学が可能とするからである。私たちは私たち自身の恐怖や脆さや死に対峙させられたからである。こうしたすべてが暴力的に私たちの記憶に蘇ってきたので、私たちは文学のなかに答えを探す。おそらくそれは、オーディオビジュアルによるメディアによって生み出された映像や情報の飽和状態を逃れ、書かれたものの世界に飛びこむためなのだ。したがって、文学はひとつの悪にたいするひとつの善ということになる。悲劇的な状況のせいで、個人は内省するようにと自分自身に送り返されたのではないだろうか。その自分自身を彼は本のお陰で探検できるのである。

(松田浩則訳)

執筆者について――

エリック・ファーユ (Éric Faye) 1963年生まれ。パリ在住。小説家。ロイター通信の記者として勤務しながら、1990年より創作活動に入る。小社刊行の主な著書には、[『長崎』](#)、[『わたしは灯台守』](#)、[『エクリプス』](#)、[『みどりの国 滞在日記』](#)などがある。

【特集 新型コロナウイルス・パンデミック下の文学——海外から】

パリの空気

イト・ナガ



「生きることを忘れることなかれ (N'oublie pas de vivre)」。哲学者ピエール・アボは、ゲーテの格言《Gedenke zu leben》をそのようにフランス語に訳した。フランス語では《n'oublie pas (忘れるな)》であるが、ドイツ語では《gedenke (思い出せ)》である。そう、生きることを忘れてはならない。とりわけコロナ禍ではなおさらのこと。

かつてこれほどまでに数字で溢れたことがあっただろうか。「クラスター」、感染者数、重症者数、死者数……局所的なもの、地域的なもの、世界的なもの……毎日新しい数字がもたらされる。こんなに毎日数字があることなんてあるだろうか！ そんなに毎日、数字を気にしているのはサッカーファンだけだ。こうした数字がなければ、コロナ禍はどうなっているだろう？ こうした数字と接することなしに、コロナ禍をどう考えればよいだろうか？

だからこそ、生きるのを忘れてはならない。例えばポエジーを例に考えてみよう。ポエジーがどういうものなのか、示すことは簡単ではない。それでも、日々の生活に折り合いをつけるひとつの方法であるのは間違いない。感染が起こった最初のフェーズでは、激しい不安のもとに不信感が募っていった。そして第2フェーズでは状況は一変し、何が起きているのか何も理解できず、みなが一様に動転してしまった。隔離が一般的なこととして起こり、許可のない移動は禁止された……。みなは必死になってヴァーチャルな繋がりを確かめはじめた。たとえば、Dailymotion, Youtube を見ることは、ひとときのポエジーとユーモアを運んでくれた ([「ああ、モンティ・パイソンのあのイカれたバカ歩き省！」](#))。動物を撮った動画だったり、鳥がさえずる動画だったり……。BBCには彼らが行った「[#LastNormalphoto \(ロックダウン前の最後の日常写真\)](#)」のシェア活動に感謝したいと思う。それから、十回も見て、十一回目だっただけ見たほうがいいエルヴィス・プレスリーも忘れてはならない。第3フェーズに移行したいま、ロックダウンから解放されたい、外に出たいという抑えがたい感情がともなうようになっている。次に待ち受ける第4フェーズはいかなるものだろうか？ すぐそこまで来ているのに、どのようにすればその先を予見できるだろう？……事情は温暖化現象と同じである。ウィルスは大気汚染のように広がっているのだ……突然そうした考えにとらわれる。フランスの上空には、フランスの空気はなく、日本の上空には、日本の空気はない。すべては混ざり、行き交っている。世

界は繋がっているのだから、当たりまえのことだ。

第2フェーズとロックダウンを開始して以降、私たちはこうしてコロナ後の世界へと入っていった。それは、ほんの少しだけ良くなる世界、あるいは、すこしだけ悪くなる世界である。意見は分かれているが、いまにわかることだろう。今のところ、おそらくこのロックダウンは私たちに少しの変化をもたらしたのだ。たとえば、行きつけのビストロの店員。コロナ前の世界では、「コーヒーが一杯1ユーロ20セントとはいいいもんだね」と店員に言うと、「今のところはね!」と彼は答えた。それ以降、ずっと同じなどとは思っていなかったのだが、最近ではその返答が変わったことに気づいた。店員が釣りを持ってきたときに礼を言うと、なんと奇妙な声でこう答えた。「あたりまえさ!」

ロックダウンのときは、いつも以上に空を見上げている。そんなに空を見上げることなんてないのだろう。それはたとえば、生活が海のなかのように層をなしていることに気づくことである。地表のちかくには、シジュウカラとツグミが飛んでおり、もう少し高いところでは、ハトやハシボソガラスが飛んでいる。さらにその上には、黒いアマツバメやヒバリが飛んでいる。そして、さらにその上空に、ときどきハヤブサが飛んでいるのが見えるといった具合だ。「そう、ハヤブサこそパリの上空の、そのまた上にいる鳥なんだ、違うかい?」

見えることのない星々で満ちている青空をいつも見つめ、ときどきは木の梢や白い雲も眺めたりする。こんなにも飛行機が飛んでいない空を見上げることになるなんて、思ってもみなかった。ある記憶が思い出される。子供の頃は、飛行機雲を見つけるのはちょっとした出来事だったのだ。今となってはそんなに飛行機雲は珍しいものではなくって、人工衛星も空に飛んでいるのが見えるようになった。ちょっとした出来事をもうひとつ。かつては、未来の夜空を飾るのは多くの人工衛星になると言われていたのだ。この夜空を飾る人工衛星の未来だけが、パンデミックの記憶に取って代わられたことになる。さらにもうひとつ、ちょっとした出来事の例をあげよう。夜の9時ごろ、南東に向けて飛んでいく3羽のカモメを見た。しかし、カモメたちが飛んでいく方向には、真っ黒な雷雲がみとめられた。すこし心配したのだが、自分はこのように考え直した。「鳥たちは自らがなせることを良く知っているのではなかろうか?」。そこからなにかヒントを得るべきではないだろうか?

ロックダウンのあいだ、水星に向かう軌道をとった惑星探査機が地球の近くをふたたび通って行った。それは、水星へ向かう軌道を修正するためになされた操作であり、その準備は長きにわたってなされたものだった。[封鎖された大陸にいる私たちに向けて探査機が送り返してくる画像](#)には、奇妙なヴィジョンがある。そこには、汚染された空気を呼吸している私たちが住む国が写っている。私たちのいる惑星では、なにか良くないものが空気のなかに見えないかたちで潜んでいるのだ。関節痛、発熱、咳、良くないものは目には見えず、それとわからない。そして2機の探査機はそこから逃げようとしている。現在、探査機は金星に向かう行程をとっているが、金星では呼吸することもままならない。

思えば、探査機は金星を越えてさらに遠くまで、天の川まで向かって行っている。私たちのいる銀河は広大な地平に向かって行っており、近くのあらゆる銀河が、容器から水を注ぐ要領でそこへ向けて集中していく。だが、どこに向かって注がれているのだろうか?

すると突然、頭の中に別の考えが思い浮かぶ。悠久の時を経て地球に生命が誕生したのであるが、実現できるあらゆる経験というものは、もうすべて実現されたのだろうか?

(10月7日)

(井戸亮訳)

執筆者について――

イト・ナガ (Ito Naga) 1957年生まれ。オルレアン在住。詩人，天文学者。フランス国立科学研究センター (CNRS) など水星について研究。小社刊行の著書には、[『私は知っている』](#)がある。

【特集 新型コロナウイルス・パンデミック下の文学——海外から】

病という試練

アナイト・グリゴリヤン

起こるべきものは避けられぬ。
用心深い者は神も守ってくれる。
——ロシアのことわざより

パンデミックが明らかになったばかりの頃、文学界は歓喜に湧いたかのようにだった——少なくとも、興味を抱いていた。私たちは、世界を席卷し180度変えてしまうような病の発生について、古典的／大衆的な文学作品を通じある意味で心構えができていたからだ。誰もがすぐさまカミュの『ペスト』やステューヴン・キングの『ザ・スタンド』を買いに走り、何人かの人はダニエル・デフォーの『ペストの記憶』のことまで思い出した。検索エンジンにこれらのタイトルが入力された数は、以前の数十倍、数百倍にもなるだろう。私の知る何人かの編集者は当初状況を好意的に捉えていたが、のちには、コロナウィルスをテーマにしたアンチ・ユートピア的な作品ばかり送られてくるとぼやいていた。有名作家のエヴゲーニイ・ヴォドラスキンが悲喜劇を書いてパンデミックについての見解を述べ、ボリス・アクーニン（最初に感染し、回復した者たちの内の1人だ）が、「実際にはそれほど恐ろしいものではない」と読者に語ったりもした。しかしこれは、パンデミックが危険ではあれともかく一種の冒険のようで、多くの人が恐怖よりも熱狂を覚えていた、2020年の4月から5月あたりの出来事である。とはいえ、次第に状況が複雑化していても、恐怖は最大の問題にはならなかった——感情の中で最も優位を占めたもの、それは抑鬱だった。

致命的な感染症についての空想力豊かな小説、映画、ゲームのどれひとつとして、感染症を、長引く日常的なものとして描いたことなどなかった。医師にとっては、感染症との闘いはまさに戦争だ。だがその他の人に関して、コロナウィルスはせわしない現代社会にこう突きつけたかのようにだった。「あなたたちはあまりにも急ぎすぎている、立ち止まりたまえ。停止し、しばし考えてみたまえ」。文学関係者の多くは、この制止に気がつきもしなかったように、自粛期間を利用してより多くの仕事をし、作品の大部分を完成させた。また、オンラインで定期的に読者と集まったり、自著のプレゼンを行ったりする作家も現れた。あらゆる点からして、オンライン形式は今本当の「ブーム」を経験しているようだ——もっとも、人々はオンラインでのコミュニケーションに瞬間に疲れてしまったのだが。

ロシアの緊急事態宣言下で多くの書店が店を閉じた。特に影響を受けたのは、大手出版社や小売チェーンと関係せず、ユニークで貴重な書籍を専門に扱う、いわゆる独立系書店だった。また、三カ月の間印刷会社が完全に業務を停止したために、出版社は刊行物の大半を電子書籍の形態に移したので、大手の書籍販売サイトの売上は増大した。すべてこうしたことは、いま世界中で起きている現象と多かれ少なかれ一致しているのではないかと思う。世界は変わりつつある、だがその変化は、過去の魅力的な小説に見られたような描写とは一致していない。現代の西欧世界は中世と違い、病は神の与えた罰ではなく人間の身体にウィルスが侵入した結果だと知っているのだから、脅威に対してより現実的で抑制のきいた対応をすることができるというわけだ。だが、私たちの心理の点でも同じことが言えるのだろうか？

カナダで働くためにロシアを離れた知人の女性が、少し前コロナウィルスに感染した。私は彼女に、ロシア人なら誰でも理解し、ロシア人でない人にはいささか奇妙に響くであろう励ましの言葉を送った。「頑張る。これも運命なのだから、必ず良くなるよ」。返事が届いた。「ありがとう。あなたはロシア人らしく、実に運命論者ね」。その時私は思った、国を去ってから、月日と共に彼女は祖国や同胞を違った方向から見るようになり、そして私たち自身はしばしば気づかないロシア人の主要な特徴の一つ、運命論者の気質に気がついたのだ、と。パンデミックの最初の頃、ロシアのいくつかの新聞にこんなタイトルを冠した記事が踊っていたのを覚えている。「恐れを知らぬロシア人たち——なぜ私たちはコロナウィルスを恐れないのか?」。実際に、私の生地であるサンクト・ペテルブルグでは、統計によれば感染症の致死率が極めて高いにもかかわらず、マスクをしている人を見かけることは珍しい。それどころか、公共の場で人々は社会的距離を保つことに大変消極的だ。社会的距離の確保、あるいはマスク着用の要請に対して、驚くべき反応が聞かれる。「もしコロナウィルスにかかるように定められているのなら、マスクも手袋もそれを防いでくれない——つまり、そういう運命なのだから」。

より示唆的なエピソードがある。私の近い友人の一人、マリヤは、感染流行の第一波の際、予防として指示されたあらゆる方法を守り外出も自粛していたのだが、友人数人と旅行に行くことを決めた——ところが集まってみると、友人の一人が明らかな感染症状を呈していた。しかしマリヤは感染した友人から離れることなく数日を共に過ごし、それから数週間後に重い肺炎をおこして病院に入ることになったのである。なぜそんな無茶なことをしたのか、と聞かれると彼女は答えた。「ただ単に、これが私の運命だとその時分かったの。抗う力なんてなかった。足がすくんでしまったみたいだね」。このような行動に対して客観的な評価を下すことは難しい。ある面では、これは確かに奇妙なことだ。とはいえ、避けようがないほど感染の可能性が高い場面で、逃げ出そうとする人が少ないこともありうるし、それには肯定的な面もある。コロナウィルスの大流行は、私たち全員にとって互いの助け合いがどれほど重要であるかを示した——人々は進んで「コロナ・ボランティア」に参加し、一人暮らしのお年寄りや高リスクの人に食料品や薬を配達し、感染した人を助け、両親が入院してしまった子の面倒を見、臨時病棟や、中等症～重症の患者が居る「レッド・ゾーン」の中でさえ救命に奔走している。

一般に危機的時期、特に感染症の流行時には、「平和な」時には忘れられがちな、生や死やこの世界における自己の使命についての古くからの考えが人々の内で目をさますと言える。この文章を書き上げるほんの数日前、私はロシア最大手の新聞『ノーヴァヤ・ガゼータ』に掲載された記事を目にした。記事では、国営の感染症病棟やコロナウィルスの状況が「神聖な」「神秘的な」といった用語を使って大っぴらにキリスト教的・宗教的トーンで描写され、医師の診断書や指示に至っては「呪文」と呼ばれている。この種の記事や意見は無数にあり、パンデミックを単なる国際的問題としてではなく、乗り越えることで全人類が刷新される試練として受け取るという、共通の傾向を示している。どんなに困難なものに見えようと、神は乗り越えられない試練を与えはしない——宗教に縁遠い人でさえ、ロシア人は好んでよくこのように言う。おそらく、試練に対するこうした信仰、どのような試練もいつか終わり、喜びと幸福への出口（他の出口はありえない!）が見つかるという信仰は、状況に耐え、経済を破壊し日々の生活を蝕むウィルスとの戦いを続けるうえでいままさに支えになるものなのかもしれない。そうであっても、時折は、もう少し慎重になっても差し支えないだろうが。

(高田映介訳)

執筆者について――

アナイト・グリゴリャン（Анаит Григорян） 1983年生まれ。サンクトペテルブルク在住。小説家、翻訳家。小社刊行の『[ロシアの物語空間](#)』に、短編集『長い夏』（抄訳）が収録されているほか、小説集『オレデシュ川沿いの村／長い夏』も小社から近刊の予定。

【特集 新型コロナウイルス・パンデミック下の文学——海外から】

舞い飛ぶウイルスへの覚書

オラシオ・カステジャーノス・モヤ

ウイルスがやってきて生命を飲み込んだ。その外部には何ものなし。死の外部には何ものなし。まるで自然が人類の軽薄とペテンと傲慢に倦み飽き、私たちは虚弱な虫けら、絶滅もありうる種なのだという境遇を思い起こさせようとしているかの如く。いざ祈らん。

*

灰色の、くたびれた日。わずかにそよ風が、新芽の吹いた枝を揺らす。一人の姿も見えない。絵葉書にはお誂え向きの平穏。いまだ覚めざる世界の静寂。脅威ははるか遠くのこと、現実味のないことに思えるが、我々の心に突き刺さっている。

*

朝の広がりゆく様の何たる静けさ。木々の安らぎ、柔らかな光、芝生の上を走り回るリスたち。この小さな村の外では世界が倒壊している。絶望と苦痛が脅かすように罅する。かつて今ほど、窓から飛び込んでくる諸々にお前が感謝したことはない。

*

ウイルスの脅威は我々に、しごく些細な己の習慣的行為に注意を払うよう強いる。ドアノブを掴むこと、蛇口を開けること、買ったばかりの小瓶や缶を開けること、つまるところ、我々にあれこれ到来する諸々。ある種の秘教的流派では高次の意識状態へと至る針路だが、我々にしてみれば恐怖がおそらくは一時的に産み落とした私生児であり、意識の針路を切り開くどころか、ただ我々の神経系を掻き乱すだけの、そんな注意、一つの覚醒の形。

*

これほど広大で複雑な、これほど強大で多様性ある国の大統領が一人の駄法螺吹きというのは驚きだ。その駄法螺吹きが住民の半分の顔を公然と、そして彼を決して認めようとしないう半分の顔を隠然と代表しているということも。

*

非現実感がまるでビニール袋さながら、お前の精神に張り付いてしまった。

*

権力のナラティブこそが、我々の注意力の最良の部分を消耗させる。襲いくるウイルスは次々と感染しては命を奪うが、権力のナラティブの手にかかることで、人を窒息させる一個の泡へと変じる。かつてこれほど新聞を読むのが不快だったことはない。

*

日々は走りゆく。精神の味気なさもまた。活力は減退し、倦怠の生ぬるい水溜りに浮かぶ。できることは何もなく、ただ生が過ぎゆくのを、すでに自分が自分ではない人間の困惑とともに眺めるだけ。

*

光を、出口への道を求め、昆虫が歩く。その時こそ死の決定的な一撃に晒される時なのだと気づかぬまま。

*

お前はお前の時代の不健全な誘惑に抵抗せねばならない。自分を犠牲者と感ずること、犠牲者の憤怒を謳歌すること、誰かがお前に感嘆し、お前を犠牲者と感ずるがゆえにお前に埋め合わせをするまで、喚き散らすこと。忘れるな。お前の身に降りかかることは、お前が少しずつ獲得してきたことなのだ。

*

そのミシガンの田舎町の床屋は、キリスト教的主題を扱った十の小説を発表し、自分の床屋の棚に念入りに飾っている。彼はパンデミックにより布告された強制的ロックダウンに反対したことで、一瞬の名声を手にした。当局の命令にもかかわらず、床屋を閉めるのを頑として拒んだのだ。床屋として働き続ける自由を守るその勇気ゆえに、彼は武闘派白人の英雄となった。幸い彼は、小説を書き続けるのには同様の振る舞いに及ぶまでもなかった。どうやら誰も彼の小説を読んではいない。その小説が取り沙汰されることはない。

*

西洋の逆説。ムスリムのヴェールにあれだけ敵意を燃やしたあげく今になって、マスクの着用で、誰もが誰の顔も見分けられない。

*

カネッティは1942年の覚書でこう述べていた。「自由の源泉は呼吸することの裡にある。誰もがこれまで常にいかなる空気をも吸い込むことができたのであり、そして呼吸の自由とは今日に至るまで、実に唯一毀損されることのなかった自由なのだ」。78年後、その自由は危機に瀕している。

*

イザヤに倣いて。砕け散った世代、歴史上知られる中で最も苛烈な威嚇作戦の犠牲者。恐怖は大気中に鉛の微粒子よりも重く立ち込め、日の経つごとに圧迫は増し、うなだれよ、空気を恐れよ、他者を恐れよと強いる。己に強いられた面繫おもがひ（口も見えず、顔も見えず）と己の幽閉に喝采を送るこの種は一体何者か……

*

己の夢を恐れ、一々の夢に凶事の前兆を読み取り、何か悪いことが降りかかるのではとおののき、昨夜夢の中で告げられた凶報を待ち構えては不安に苛まれ、その日をまんじりともせず過ごす一人の男。

*

当世の思想警察は近々、『千夜一夜物語』を禁書とするだろう。というのもスルタンの留守中にその妃を罫に嵌めるのは、決まって筋骨隆々たる大男の黒人奴隷だからだ。人種差別的ステレオタイプ、そんな判決を彼らは下すだろう。

*

彼は歯が砕けた。睡眠中ストレスと恐怖で歯を食いしばるあまり、歯が折れたのだ。起こったのは不快感、口臭、緊急歯科、そしてマイナス一本。興味深いのは、彼はそのことを思うと、己の顎には歯を砕くほどの力があったのだと自分を特別に感じ、誇りすら覚える点だ。数週間後の新聞で、パンデミックが原因で歯が砕ける事例が非常に多いと知った彼は、やはり自分を特別に感じ、恐怖のあまり歯を折るその広大なグループに属していることを誇りにすら思う。身に起こるのは何でも構わない、苦痛だろうが喜びだろうが不動の習慣だろうが、彼は自分を特別に感じ、誇りすら覚えるだろう。

*

不確かさの中で生きる。不確かさの中で死ぬ。それだけが確かだ。

(浜田和範訳)

執筆者について——

オラシオ・カステジャーノス・モヤ（Horacio Castellanos Moya） 1957年生まれ。ホンジュラス出身，アイオワ在住。現在，アイオワ大学教授。小社刊行の著書には，『[吐き気](#)』がある。

シリーズ「エコクリティシズム・コレクション」 の想像力

野田研一

水声社の「エコクリティシズム・コレクション」が今年10冊目に到達した。奥付を確認すると、シリーズの1冊目と2冊目は同時刊行で2011年7月。そして10冊目が今年2020年4月。意識していなかった。2011年といえば東日本大震災の年、そして2020年は新型コロナ禍、とりわけ緊急事態宣言の時期。いずれも日本の歴史に記録される大規模自然災害の年ではないか。いたずらに時代の兆候を読みとるつもりはないものの、シリーズ刊行を見守ってきた身とすれば、偶然とはいえ、ある種の感慨なきにしもあらずである。

文学と自然環境の関係に焦点を当てて考究するエコクリティシズム（環境文学研究）という批評理論が、本格的に始まったのは1990年代の後半。1995年に刊行されたハーヴァード大学のアメリカ文学研究者ローレンス・ビュエルによる『環境をめぐる想像力——ソロー、ネイチャーライティング、そしてアメリカ文化の形成』（未邦訳）が、この分野の本格的かつ代表的な研究書である。浩瀚なこの分厚い研究書が卓抜なのは、そのメインタイトルの選択にある。「環境をめぐる想像力」（英語では environmental imagination）。エコクリティシズムの理論的かつ実践的な里程標ともいべきこの書が、「想像力」という言葉を選択した、その点に何よりも強く惹かれた。

それは概ね2つの意味を内包しているからだ。1つは「想像力」という言葉で、ビュエルは、それがまぎれもなく〈文学〉であることを強調したかったのだと思われた。言ってみれば、「想像力」という言葉はほとんど〈文学〉と同義の用語として使われている。この語彙の選択によって、下手をすれば単純な政治化に横滑りしかねなかった環境文学研究に〈文学〉という歯止めがかかったと私は考えている。2つめには、「想像力」とは他者に向けて架橋を試みる営みのことだと告げているのである。自然という他者への想像力である。「他者性」という問題が深く意識されている。梨木香歩は、かつて『渡りの足跡』（2010年）というエッセイ集において、鳥に向けるみずからの知的営為を「付度」という言葉で語ったことがある。「付度」という言葉がジャーナリズムによって不快きわまる意味に化けるはるか以前のことである。梨木の言う自然への「付度」こそ、ビュエルの「想像力」に対応するものと思われた。

もの言わぬ他者、敵対する他者、不可知の他者。見方によっては死せる存在に等しい自然。もっとも根源的な意味での他者的存在。自然という他者と向き合う文学を研究対象とするエコクリティシズムは、それこそ「想像力」を以て相渉るほかない知の領域に向きあっている。自然の他者性が重要なのは、それが他者という存在の一種のモデルでもありうるからだ。だとすれば、エコクリティシズムとは、たんに狭義の「環境問題」を「付度」してみせる分野などではなく、正面きって他者的存在に向き合おうとする分野だといったほうが正確である。

そのとき、問われるのが「想像力」である。ビュエルという博覧強記の学者が environmental imagination という言葉で語ろうとしたもの、それを、当時の私は、エコクリティシズムのあるべき方向への秘かなメッセージとして受けとめていた。エコクリティシズムとは文学研究以外の何ものでもないというメッセージである。じっさい、若くして、もっとも正統的で篤実な古典アメリカ文学の研究者として著名であったビュエルが、エコクリティシズムなどという新参の胡乱な領域に手を出した

ことは、多くの研究者にとって驚きであった。しかし、彼が「環境をめぐる想像力」という言葉で告知したのは、自然と人間の関係の学ともいうべきエコクリティシズムがまぎれもない〈文学〉研究であるという透徹した認識であった。

たとえば、石牟礼道子の『苦海浄土——わが水俣病』（1969年）の重さは、患者たちの沈黙と相渉るこの作家の、途方もない想像力が生み出したものである。想像力とはたんに、そこにあるものを提示する力ではない。そこにあるものを見落とさず、真摯に覚知する力である。石牟礼作品ほど想像力という作家の権能の深みを指し示す文学を私は知らない。そして、そのような想像力こそが〈文学〉を文学たらしめる根源であるに違いない。10冊目を刊行した水声社の「エコクリティシズム・コレクション」シリーズは、まさに沈黙せる他者＝自然と相渉る文学を捉えようとする、それ自体が「環境をめぐる想像力」の結晶である。

執筆者について——

野田研一（のだけんいち） 1950年生まれ。立教大学名誉教授。専攻＝アメリカ文学／文化。日本における環境文学研究のプライム・ムーヴァーの1人。小社刊行の著書には、[『失われるのはぼくらのほうだ——自然・沈黙・他者』](#)がある。

ARAKAWA から ISOZAKI へ

——荒川徹さんの吉田秀和賞受賞に寄せて

沢山遼

荒川徹さんの『[ドナルド・ジャッド——風景とミニマリズム](#)』が、第30回吉田秀和賞を受賞した。候補書籍、総数135点のなかからの選出である。本書は荒川さんの初の単著だが、これが、すでに多くの優れた業績を備えた著者たちの書籍を抑えての受賞であることは言うまでもない。筆者は、その受賞に驚くとともに、賞とは、本来こうあるべきだと思った。

筆者は、本国アメリカで出版されたジャッドに関する一連のモノグラフにも一応目を通してはいるが、荒川さんの著作はそれらと比較しても分析の緻密さや論理の説得力において傑出していると感じる。それだけではなく、筆者は、荒川さんの著作を通して、このような著作を書かせたジャッドおよびアメリカ戦後美術の水準の高さを改めて実感することにもなった。

ところで筆者は、11月に渡米し、現在はニューヨークに滞在している。このコロナ禍のなかでの渡米を急いだのは、ほかでもない、ニューヨーク近代美術館で開催されているジャッド展を見るという動機があったからだった。荒川さんの受賞の報が入ってきたのは、ジャッド展を観覧した数日後のことである。

ジャッド展は、ジャッド財団の全面的な協力のもと、ニューヨーク近代美術館が総力を挙げて開催した展覧会だ。展覧会は、ジャッドのキャリアを3期に分け、それぞれに1部屋を当てて、合計3室をつかってジャッドの作品を俯瞰する。展覧会の規模はそれほど大きいものではないが、かえって展示の密度は高い。そもそもジャッドの作品は、1つ1つの作品の強度が非常に強い。とりわけジャッドが立体をつくりはじめた62年からの数年間の作品——工場によるファブリケーションではなく、ジャッド自身の手が加わったもの——は、通常の美術作品の鑑賞経験から逸脱する、奇妙 (weird) な感覚に満ちていた。

が、これはそもそもジャッドによって意図された性質である。ジャッドは、そのキャリアの出発点から、自作が絵画や彫刻などの美学的ジャンルに帰属することを否定していた。荒川さんは、ジャッドが非芸術であるダムや橋などの造形物や工学、無機的な建築に関心をもっていたことに注目している。ジャッドの作品もまた、それらと同じく、芸術というカテゴリーに必ずしも収まる必要のない、物体 (object) としての強度をもつ。荒川さんの著作は、こうして、ミニマリズムの芸術が非芸術であるところの人工風景への関心をもっていたことから論理を展開し、「別の」ミニマリズム史を描き出す。それは、ミニマリズムと建築を接合するという試みでもあった。

また本書は、これとは異なる観点からミニマリズムの芸術を解き明かしている。それは、ミニマリズムが、モダニズムによって抑圧されてきた遠近法を復活させるものであったという点だ。規則的に連続しながら配置されるジャッドのオブジェクトをある観点から見るときにもたらされるのは、遠近法的な収縮の感覚である。このとき遠近法は、比例や調和級数などの数学的な法則を内含するが、音楽もまた、それと同じ数的秩序を共有している。荒川さんの議論は、数的・幾何学的秩序と個別の主体の「共鳴」を、音楽的な見地から解析する。

ゆえに本書は、主に2つの「美術外」の領域と接続される。1つは建築 (人工風景) であり、1つは音楽である。また、前者には、非芸術を芸術としてフレーミングするという側面があり、後者に

は、遠近法的な法則を感覚するという側面がある。しかし、この2つの側面は厳密に連続している。なぜなら、非芸術を芸術としてフレーミングすることは、まさしく、ものの見方、すなわち「観点 perspective」の問題であり、後者もまた、遠近法という「観点 perspective」の問題であるからだ。

建築と音楽との隣接関係については改めて指摘するまでもないだろう。形而下の「物質」である建築に負い目を感じていた人文主義の時代の建築家たちは、形而上的な音楽への憧れをもって、音楽的＝数学的なプロポーションや比例を建築のなかに取り入れていったからである。したがって、荒川さんの著作における建築と音楽の登場は、その議論自体が、ルネサンス以降の芸術実践とミニマリズムの芸術との連続性を内在させてもいる。ちなみにジャッドは、コロンビア大学で人文主義における建築の比例関係を論じた『ヒューマニズム建築の源流』のルドルフ・ウィットカウアーに学び、大きな影響を受けている。

こうした議論が喚起するのは、「美術」という従来の範囲を超えて展開されるミニマリズム芸術の拡がりである。同時に、荒川さんの議論は、厳格なシステムをもって展開されるミニマリズムの芸術を、それ自体システムティックな厳密さによって制御された筆致で描き出す、循環的なものでもあったと言えるだろう。

こうしたことを考えるとき、筆者は、今回の審査委員選評を寄せたのが磯崎新氏であったことに深い感慨を覚えた。磯崎氏が建築家である、というだけではない。磯崎氏こそは、建築におけるシステムや操作を、「手法」と呼ぶことで、建築におけるミニマリズムを実践してきた建築家であったからだ。たとえば、群馬県立近代美術館においてその手法は、1対1の立方体やグリッドなどのフレームだけで建築をつくり出すという実践となって現れている。ゆえに、磯崎建築が展開してきた建築の強力な「原理」は、ミニマリズムとの同時代性をもつものであったかもしれない。加えて、とりもなおさず、筆者自身が、「なら100年会館」や「大分県医師会館」などの磯崎建築を、1つの「彫刻」として見てきたことを告白しておかなければならない。それはいわば、建築を1個の自律した彫刻として見るというパースペクティヴ＝遠近法的観点を与えられる経験だった。いま、荒川さんの本を再読し、その経験が改めて蘇った。

執筆者について――

沢山遼（さわやまりょう） 1982年生まれ。美術批評家。武蔵野美術大学、首都大学東京非常勤講師。小社刊行の主な共著書には、[『絵画との契約——山田正亮再考』](#)、[『高松次郎を読む』](#)などがある。

夢のような物語

高山花子

死ぬ前、最後にブランショが読んでいたのは、パスカル・キニャール、なかでも彼の『シャンボールの階段』、ヴァレリー、それからアイラ・レヴィンの『ローズマリーの赤ちゃん』だったらしい。2014年に日の目を見た『レルヌ』誌のブランショ特集号の末尾には、そんなことが書かれていた。同号には、ロジェ・ラポルト夫人であるジャクリーヌ・ラポルトへのインタビューも載っていて、最後のほうでは、あるとき彼女が電話でブランショと話していたら、インターホンが鳴ったので、郵便屋さんから荷物を受け取り、電話口に戻って中断を詫言ると、ブランショが、「いや素晴らしかったよ。きみたちの家に自分が着いて、それで扉を開けてもらった気がした」と笑ったエピソードが紹介されている。それから、もうひとつ、ラポルト夫妻がパリを訪れた際、映画館に行こうと道を歩いていたら、向こう側の歩道に女性と二人でいるブランショが見え、ちょうどそこにあった映画館にそのままブランショたちが吸い込まれ、戸惑いながら二人もおなじ映画館に入ったという話がされている。翌日、ブランショからは、「二人は夢のなかの人物のようだった」と手紙が届いたという。そのとき彼女たちが、ブランショと一緒に、けれど離れ離れに見た映画は、イングマール・ベルイマンの『沈黙』で、ジャクリーヌによると、ブランショは古典好きで、フランス映画はあまり見なかったという。あるとき、悪夢について長々と議論したあと、彼は彼女をすごく怖いホラー映画に連れて行ってあげると言ったけれど、それが実現することはなかったらしい。

『ローズマリーの赤ちゃん』は映画化され、フランスでは1968年10月に公開された。新婚のローズマリーが、夫のガイと子供をつくる予定の晩、悪夢のなかで悪魔に襲われ、その後、悪魔の子を妊娠しているのではないかと不安に苛まれてゆくホラー映画である。最終的に死産を告げられるが、じつは赤ん坊は生きていて、悪魔崇拝者たちによって悪魔の子として奉られているとわかり、最後、ローズマリーが目にした、人間のものとは思われない赤ん坊の腫が映しだされて終わる物語である。ララバイの響き渡る静かなホラーだが、どこからどこまでがローズマリーの悪夢なのかかわからないところがいちばん怖い。きっとブランショはこの映画を見ていたのだろうと空想する。

キニャールの『シャンボールの階段』は、幻想的というよりは、エドワールが切り花を「植物の卵巣」と呼ぶようなグロテスクが印象的で、なによりやはり、この世とあの世の境の物語である。恋人ロランスの離婚話がようやく進みはじめたころ、車を運転中のエドワールは、海辺に佇む幽霊のヴィジョンを見る。脳裡に浮かぶ様々な過去の事物は、あの世から戻ってきたもの＝幽霊と呼ばれている。そのとき、視界に入る生身のはずのロランスさえも幽霊と呼ばれている。闇夜の森の泉で溺死しかけ、引きあげられたロランスが非人間的に泣き叫ぶ異界めいた場面もある。なによりも、おりおり現れ、つきまとして離れないのは、幼年期のイメージである。エドワールが、礼拝堂に喩えられる19世紀の風采を残したかつての子供部屋に入ると、死者の国からおもちゃの車が彼をめがけてやってくる。彼が子供時代に上ったシャンボールの城の二重らせん階段は、彼の母親がけっして上って来なかった子供部屋へとつづく階段のイメージとも重ねられているが、天国と呼ばれるその子供部屋は、文字どおり死者の世界と幻視的に結ばれている。

そこで思い出されるのは、ブランショ最後の長篇小説『至高者』である。病気休暇から戻った市役

所の戸籍係のアンリ・ソルジュは、冒頭から家族仲のよくないことを示唆するが、家族へのただならぬ執着は随所に織り込まれている。街に疫病の噂がひろまるなか、独身で一人暮らしの彼は、姉のルイズによって彼女が母と義父と暮らす家に連れてゆかれ、階段を上った先にある、母には聖域と呼ばれる彼女の秘密の部屋で、もっとも恐ろしい過去の記憶に襲われ、幽霊さえも見る。義父による彼女への愛撫といった身体接触よりも直裁に、姉と弟の残虐な秘密が子供時代を過ごした家で紐解かれる。二人が母からの言いつけに背いて、タクシーで荒地に向かう場面は、何度も読み返されるべきだろう。そこに乱立する建物は、地下室と墓穴からなる都市を生み出そうとしており、道沿いには非現実的な花々が咲き乱れている。二人は囲い塀の扉を開けて墓に入ってゆくのだが、階段を下り、地下室へ向かうアンリは、かつて同じドレスを着た彼女とここに来たことがあることを了解し、デジャヴを感じながら仰向けになり、かつて彼女から聞いた言葉を彼女からもう一度聞く。そして、彼は再び彼女に襲われるのである。疫病が本当に生じているのかも不確かなまま、衛生局からひとびとに自宅待機が推奨される物語の終盤、さりげなく差し込まれる、「家庭は真の監獄だった (La famille était un vrai baigne)」という一文と、直後につづく、「家庭はまたその反対でもあり、これほどまでに自殺者が多いのは、軽症の感染者のなかには、あまりにも長引く病の危険に近い者を巻き込まないための方策を自殺に見出した者たちがいたからである」という説明には、このような家族のイメージも織り込まれている。高熱に魘されるたびに見る夢のような物語である。

執筆者について——

高山花子（たかやまはなこ） 1987年生まれ。専攻＝表象文化論，思想史。東京大学東アジア藝文書院特任研究員。小社刊行の翻訳には、マルク＝アラン・ウアクニン「だからひとは蜻蛉を愛する……」（『[午前四時のブルーⅢ 蜻蛉の愛, そのレッスン](#)』），主な論文には、「『瞬間』に耳を澄ますこと——モーリス・ブランショにおける声楽的概念としての『歌』」（『表象』8号，月曜社）などがある。

Quarantine

高須次郎

今年の1月にスロヴェニア・クロアチアに旅した。旧ユーゴスラビアで旧ソ連圏では旧東ドイツとともに西欧にもっとも接していた国だ。一山越えればオーストリアになるスロヴェニアの避暑地ブレッド湖畔には、チトー大統領の夏の別荘として第2次世界大戦後に建てた豪勢な館がある。権力をとれば考えることは同じなのだろうか。

クロアチアは、青く明るいアドリア海岸沿いを港と入江でつながって南へと延々と伸びている。訪れて合点がいった。ベネチアの海域だからだ。アドリア海の真珠と謳われる港湾都市ドゥブロヴニクは、ユーゴ内戦では、荒涼とした大地が海に迫る港を包囲され猛爆撃を受け街の7割ほどが破壊された。ユネスコ世界文化遺産は「危機にさらされている世界遺産」となった。街のメインストリート、プラッツァ通りには、いまでも銃弾の痕跡が残るが、冬でも眩しいほどの日差しからは想像もつかない。

港のすぐ沖合の小さな島の裏手は、ベネチアと海の覇権を争った時代のラグーザ共和国（ラグーザはドゥブロヴニクのイタリア語名）にやってくる商船などの繋留地だったという。ペストは海から船が運んでくると恐れたラグーザ共和国は、ベネチア共和国よりも早く1377年に、入港する商船をドゥブロヴニクの周辺の島に隔離し、その後沖合のロクルム島の裏手などに30日間、留め置くことにした。水と食料は供給された。ペストがあれば荷物も人も放棄された。その後、隔離期間を40日間にしたという。

海外旅行などでふだんは気にも止めないが、「検疫所」という関所がある。英語で「Quarantine」とある。隔離するとか検疫するという訳だが、水声社の読者なら、フランス語でquaranteは40だから、Quarantineは40日間、と思いが当たる。イタリア語ではquarantinaだ。Quarantineはベネチア語だというが、それが、フランス語になり国際共通語だったところに「Quarantine」として定着したのだろうか。

そして、長い飛行機は疲れるね、歳だねなどと女房と話しながら戻ってみると、コロナ騒ぎだ。いまは感染確認者の隔離期間は14日となっている。それも日本と海外では大違いで、韓国を往復している友人の話では、成田で陽性者と分かっても自宅隔離で、コンビニへは行っていいですよ、などと言われるらしい。水と食料は自前で調達しろと言うことか。日本人の几帳面さなど国際的に評価されていたことが、コロナ対応では日本のいい加減さが明らかになって、呆れていますよという。日本の防疫当局はQuarantineをなんと考えているのだろうか。

昨日、1日の新規感染確認者が2000人を超えた。個々人はこれ以上気をつけられないほど気をつけているのに、経済再生担当大臣がコロナ担当大臣というブラックユーモアみたいなバブルに浮かれる自公政権は無策のままでいくのだろう。そして本当のパンデミックが訪れるのだろうか。

(11月19日)

執筆者について――

高須次郎（たかすじろう） 1947年生まれ。緑風出版社長。主な著書に、『出版の崩壊とアマゾン』（2018年）、『再販／グーグル問題と流対協』（2011年、いずれも論創社）などがある。

【連載】

失われた旅を求めて

—Books in Progress 4

廣瀬 覚

〈Go to Travel〉とは無縁でも、10月2日午後8時45分ロンドン発の列車に乗り込む一行とともに、世界一周の旅に出かけることはできそうだ。旅程は、スエズ運河を抜けてインドへ回り、香港・横浜に寄港して太平洋を横断、鉄道に乗り換えてアメリカ大陸を一路東へ、ニューヨークからイングランドへ船で帰国。途中、トラブルもあればロマンスもあり、スリル満点の冒険と驚きの結末が待っている——そう、ジュール・ヴェルヌの傑作『八十日間世界一周』である。

世界一周が物珍しい頃から読者の想像力を外の世界へ誘ってきた本書を一読して、「フィリアス・フォッグ氏は旅をしていたのではない。一つの円周を描いていたのだ」と書きつけたのは、ジョルジョ・デ・キリコであった。秋の日の午後には漂う神秘と憂愁を描いた画家は、「スリッパを履いた探検家」ことジュール・ヴェルヌは、旅や冒険の小説を書く「子供向きの作家」ではなく、誰よりも巧みに「ロンドンの形而上学」を書いており、「歩きまわる本物の幽霊」であるフォッグ氏は結局、頭のなかだけで旅をしたのではないかと自問する……。出発—到着の見分けのつかない汽車が描かれたデ・キリコの「形而上絵画」と、言わずと知れたヴェルヌの冒険譚——この意外な接点を、反形而上学者ニーチェを介して明らかにするのが、間もなく小社から刊行される予定の『ジョルジョ・デ・キリコ——神の死、形而上絵画、シュルレアリスム』（長尾天著）である。「僕はニーチェを理解した唯一の人間なんだよ」と、打ち明けたデ・キリコの、謎めいた「形而上絵画」に理論的なパースペクティブを与え、美術史上に位置づける本書はまた、20世紀の西洋美術史から漏れ出してしまうシュルレアリスム独特の次元をも予告している。（「文学のなかにも美術のなかにも私たちはいないのである」というブルトンの言葉通り、デ・キリコの絵画を通りがかった記号がシュルレアリストたちに取り憑くさまは、[【崇高点——ランボー、ブルトン、カプラン】](#) [G. セバグ著、鈴木雅雄訳] をめぐるだけでお分かりいただけるだろう。）

しかしながら、世界一周を脳内の旅として読み替えるアイディアは、あながち間違っていない。それどころか、80日のうちに本当に世界一周は達成できるのか否か、自らの財産を賭けてまで挑戦した資産家フォッグ氏の立場になってみれば、悠々と旅の景色を楽しんでいる場合ではないはずだ。事実スケジュールを厳守するために、フォッグ氏は金に物を言わせて、象を走らせ、船を抱き込む、等々もはや何でもありである。この制限と逸脱の絶妙なバランスこそ、本作をこれほどまで読み応えのあるものとして今日まで伝えているわけだが、しかし、天才ヴェルヌの手腕は単に一作のなかだけに留まらない。予定していた行程に在りて自らを、必死に追いかける現実の自分——まさにシミュレーションの世界で旅する男の物語に潜んだ、『ロビンソン・クルーソー』以来の近代文学が抱え込む独我論的世界観を鋭く捉え、かつ物語の結末を呼びこむあの仕掛けから、独我論的世界からの解放と同時に、〈驚異の旅〉の連作を真に成立させるロジックを剔出する石橋正孝先生の論稿をはじめ、「子供向きの作家」ではないヴェルヌを多方面から捉える論集『ジュール・ヴェルヌ再発見（仮題）』（新島進編）の編集作業も着々と進行中だ。シミュレーション的感性をもったヴェルヌとレーモン・ルーセルの類縁関係に迫る新島進、科学小説を書く一方E. T. A. ホフマン譲りの幻想性を作中に忍ばせずにはいられない作家の性を明るみに出すヴェルヌ研究の泰斗F. デース、かたやA. デュマ『モンテ・

クリスト伯』からの影響を微に入り細に入り検証する三枝大修，ポーが拾い上げヴェルヌやブラッドベリが引き継いだ「空洞地球説」の魅力を語り尽くす巽孝之，ドイツのSFの父にしてヴェルヌを頑として認めないクルト・ラスヴィッツを紹介する識名章喜，〈文学を更新するSF〉の父ヴェルヌとそれに終止符を打ったS. レムという大胆な仮説を打ち出す島村山寝，ヴェルヌを読むブルーストという金鉱を探りM. ビュートルとともに文学史の裏をかく荒原邦博，明治以降の近代日本演劇史に登場するヴェルヌの知られざる影を追った藤元直樹の，豪華9名の先生方による本書は，さながらヴェルヌの文学的世界を遊覧するためのパンフレットである。（ぜひ、『水声通信第27号』（特集ジュール・ヴェルヌ）も旅のお供にくわえていただきたい。）

とはいえ，ヴェルヌの傑作から時は経ち，家にいながら何処とも知れぬ土地を背景に遠隔通信が推奨される現在の私たちにとって，お手軽な仮想の旅は味気なく感じられよう。かの名所を一度は訪ねてみたいという欲求も，画面の前で消化されては食い足りないというべきか。あるいは，場所はかまわない，どこか遠くへ，ともかく今ここを離れたいという衝動が封じ込められているというべきか。（はたまた，フォッグ氏と桁は違えど，自分の金を守るために出かけてしまうか。）いずれにしる，「人生は旅である」という紋切型とは対極の，旅に生きた詩人の文章を読むことで，慰めにも，戒めにもすることとしよう。「自分の内奥への旅でしかないものよりはるか遠くへ，いつものように旅をした」——ヴィクトル・セガレンが没してから一世紀，ようやくこの類稀なる旅人の核心を日本語でお届けできる。「セガレン著作集」全8巻のうち，マオリ文化との出会いを綴り〈エグゾティスム〉に目覚める『ゴーガンを讃えて／異教の思考』（第2巻），1度目の中国大遠征で認められたエッセイ『煉瓦と瓦』（第8巻）の校正刷が組み上がった。ゴーガンをモデルに，画一化する文化から文明の再生を試みる超人的芸術家小説や，独特のゴーガン（＝絵画）論を取めた前者は，E. グリッサン『[ラマンタンの入江](#)』との交錯を楽しむことができるし，昼は馬上で夜は阿片を片手に，中国を迂回するヴィジョンを書き取った後者は，セガレンが残したアイディアの宝庫である。マオリにしる，清朝にしる，かつてのヨーロッパにしる，失われゆくものへの鋭敏な感性は，現代の私たちを否応なく旅へと誘うだろう。

執筆者について——

廣瀬覚（ひろせさとる） 1991年生まれ。水声社編集部所属。

【連載】

原田マハからバルザックへ

——裸足で散歩 4

西澤栄美子

山手線に乗り換えて文庫本を開いた筆者の左隣に、同じ装幀の文庫本を読む男性が坐っていました。原田マハ著『たゆたえども沈まず』⁽¹⁾です。フィンセントとテオのゴッホ兄弟、日本人画商を巡る小説で、カバーには、ゴッホの『星月夜』が使われています。思わず声をかけ、「面白いですね」と話しました。冊子型の本がもたらした、初めての体験でした。

本のもたらずゆしむ(?)をもうひとつ。筆者の住む東京の、区立小学校の隣の狭い土地に、突然、管理人不在の小ホテルの計画が持ち上がりました。反対運動や1カ月余りで集まった3000筆におよぶ反対の署名(2つの新聞の東京版にも取り上げられました)にもかかわらず、ホテル建設が行われ、区側は、当初から現在に至るまで、「旅館業法に基づき許可申請が出され、許可基準が満たされた申請については、法により許可しなければならない」の一点張りです。そもそも小中学校など、学校施設の半径100メートル以内ではホテルなどの営業は法律により禁止されていましたが、観光立国、オリンピックにむけての法改正で、その規制がなくなったのです。

小学校の隣に管理者不在の(しかも学校を見下ろす窓やバルコニーまでついた)ホテルが営業を開始すれば、性能が向上し、赤外線でも、服の上からでも下着まで写せるカメラやスマホで、校庭や教室内の子供たちが、盗撮され無断でSNSにあげられる可能性があります。ごく最近のことですが、保護者以外にも運動会の見学を許可した幼稚園(!)の噂がネットで拡散し、望遠カメラを持った人たちが押しかけて大混乱になったとの報道もありました。登下校の安全も危惧されます。区の教育委員会の、許可を出さないよという進言後も、区側の見解は変わりません。同窓会を中心に立ち上げられた〈小学校と地域の環境を守る会〉による反対運動も高まっているのですが、学区域の町会長の1人が「ウィークリーマンション案」を独断で業者側に持ちかけたり、小学校の元PTA幹部と称する人が、反対運動を保護者のなかで立ち上げようとした保護者に、「余計なことをするな」と脅したり、「小学生に国際感覚を与えるホテル賛成」という匿名の張り紙が貼られたり、と、それぞれが何らかの利権を得ようとしてのことと思われませんが、小悪党、中悪党の暗躍が続いています。バルザックの小説世界⁽²⁾を思わせます。国や時代を超えて、少しも古びないバルザックの作品を通じて、「人間喜劇」を学んできた筆者にとって、事態を「総合的」、「俯瞰的」に見ることができることは、読書の与えてくれる大いなる力です⁽³⁾。

(1) 原田マハ『たゆたえども沈まず』(2020年、幻冬舎文庫)、表紙カバー:フィンセント・ファン・ゴッホ『星月夜』(1889年、ニューヨーク近代美術館蔵)。

(2) 《バルザック幻想・怪奇小説選集》(1—5巻、2007年)、《バルザック芸術・狂気小説選集》(1—4巻、2010年)、《バルザック愛の葛藤・夢魔小説選集》(1—5巻、2015—2016年)、いずれも水声社刊。

(3) 現在、文部科学省を中心に、学習指導要領の改訂を中心とする高校教育改革が進んでいます。その中で従来の「現代文」が、「実用的な文章」「論理的な文章」の「論理国語」と、「文学国語」に分かれ、単位の関係で「文学国語」を履修しない高校が増えていくことが予想されています。『山月記』も『こころ』も『舞姫』も教室で扱わないようになりつつあります。詳しくは、東京大学文学部広報委員会編『ことばの危機 大学入試改革・教育政策を問う』(2020年、集英社新書)をお読みください。

執筆者について——

西澤栄美子（にしざわえみこ） 1950年生まれ。もと成城大学講師。専攻＝美学，フランス文学。小社刊行の主な著書には、『書物の迷宮』，主な訳書には，クリスチャン・メッツ『映画記号学の諸問題』（共訳），同『映画における意味作用に関する試論』（共訳）などがある。